

はじめに おしゃべりな絶滅動物

「近代の絶滅」に出会う

生きものの絶滅、とりわけ「近代の絶滅」という現象にとらわれるようになつて久しい。

十代後半だった頃、アメリカのSF作家ロバート・シルバーアーグによる『地上から消えた動物』(ハヤカワ文庫、一九八三年)や、イタリアの生物学者フランチエスコ・サルバドーリらの『大図説滅びゆく動物』(小学館、一九八〇年)を読んだ。そして、魅了された。

それらの中では、ドードー、ステラーカイギュウ、オオウミガラス、リヨコウバト、フクロオオカミといった、この数百年のうちに絶滅した種が紹介されていた。

モーリシャス島のドードーは『不思議の国のアリス』に代表されるような物語の中に幾度も登場してきた飛べない鳥で、ステラーカイギュウはかつて北太平洋に生きていた体長一〇メートルにも及ぶ優しい「人魚」(Sirenia, ジュゴンやマナティーなどを含むカイギュウ類のこと)だ。北大西洋のオオウミガラスは「ペンギン」の語源になつた「元祖ペンギン」として知られ、リヨコウバトは数十億羽の巨大な

群れを作つて北米大陸を旅した。そして、オーストラリアのフクロオオカミは、英語ではタスマニアタイガー（虎）とも、タスマニアウルフ（狼）とも呼ばれ、ネコ科なのかイヌ科なのかと混乱させられる。しかし、実はカンガルーやコアラと同じ有袋類^{ゆうたいるい}だ。

これらの魅力的な生きものは、恐竜のように何千万年も前に消え去つたわけではなく、つい「最近」まで地球上に存在していた。ヒトによる狩猟や生息地の破壊など、なんらかの「人為」によって数を減らし、ドードーは一七世紀、ステラーカイギュウは一八世紀、オオウミガラスは一九世紀、リヨコウバトとフクロオオカミは二〇世紀に、それぞれ絶滅してしまつた。英語では、「近代の絶滅（modern extinction）」という言葉があり、おおむね一七世紀の「ドードーの絶滅」よりも後の事例に対して使われているようだ。

絶滅を語り直す

以来、「近代の絶滅」という現象が、ずっと心の底にある。

執着、といつてよいと思う。「会えそうで会えなかつた」悔恨と惜別の念や、わたしたちが絶滅させてしまつたという贖罪の念などが混ざり合つて、名状しがたい複雑な思いにとらわれる。

大学を卒業した一九九〇年代からは、目立つた絶滅種の痕跡をたどる旅をするようになつた。標本を所蔵する自然史博物館を訪ねるだけでなく、かつての生息地に足を運び、地元の研究者と話し合つたり、一次史料を確認させてもらつたりもした。

しかし、これらについて、自分が何かを書く、ということは想像できなかつた。というのも、すでに絶滅してしまつて新たな展開のない生きものについて、あらためて何かを書く意義が見いだせなかつたからだ。それこそ、既存の書籍を読めばいい。その後、類書はさらに増えたから、同じようなことを同じような手つきで訴える意義をますます見いだせなくなつた。

事情が変わつたのは、二〇一四年、オランダの歴史研究者リア・ウインターズとイギリスの鳥類学者ジュリアン・ヒュームが発表した論文⁽¹⁾を読んだときのことだつた。それによれば、一六四七年、つまり、モーリシャス島で野生のドードーが絶滅間際の時期に、日本の長崎の出島に一羽の生きた個体が連れられてきていたといふ。

ドードーが日本に来ていた！ というのは、驚くべき事実である。遠い島で人に見出されるやいなや絶滅してしまつたドードーが、歩み寄つてきたようにすら感じた。

日本に来たドードーはその後、どうなつたのだろう。日本語で書かれている史料を見る必要があるわけだから、日本語話者が調べる必要があると感じた。

すぐさま論文著者に連絡を取り、日本国内での調査を開始した。ヨーロッパにある他の標本を見てまわり、生息地だったモーリシャス島での発掘調査に参加させてもらつたりもした。そして、二〇一二年には、ノンフィクション『ドードーをめぐる堂々めぐり——正保四年に消えた絶滅鳥を追つて』(岩波書店)、二〇二三年には、小説『ドードー鳥と孤独鳥』(国書刊行会)を上梓することができた。

結局、日本国内でドードーがどこへ行つたのか解明することはできなかつたのだが、ノンフィクションをまとめ、小説として物語を紡ぐ中で多くのことに気づかされた。

「近代の絶滅」には、まだまだ汲み尽くせない論点がある。それらを軸に新たな「語り直し」が必要だ。むしろ「書くべきだ」と。

二一世紀の科学から脱絶滅の技術へ

語り直しが必要な理由の中で、もつとも大きなものは、「絶滅動物についての新知見」だ。二一世紀になつて進んだ新たな科学的探究によつて、次々と興味深いことがわかり、知識が更新されている。例えば、化石や剥製から3Dモデルをつくることが簡単になつたおかげで、これまでの通説が覆ることがある。フクロオオカミの場合、より正確な体重を推定でき(大幅に下方修正)、より精緻に動き方を検討できるようになつた結果、かつて「ヒツジを食べる」と目の敵にされた悪評が、実は濡れ衣だつたとわかつた。フクロオオカミは、その悪評ゆえに報奨金がかけられて駆除されたので、そういう誤解さえなければ、今も生き延びていた可能性がある。

また、ゲノム科学の進展は、さらに広範な話題を提供してくれる。

「近代の絶滅」は、ここ数百年に起きたことだから、最低でも骨が、場合によつては皮や内臓まで博物館などに保存されている。映画『ジュラシック・パーク』の恐竜のように数千万年以前の遺物からDNAを抽出することは難しくとも、基本的にはDNAを抽出した上で塩基配列を読み、ゲノムを決定することが可能だ。本書の執筆時点で、先にあげたすべての種ですでに試みられている。

ゲノムとは、生物のもつ遺伝情報の全体をさす言葉で、それがわかるということは、生物の「設計

「図」を手に入れることとされる。地球生命の進化や多様性の機微に触れる情報であつて、そこから始まる科学的な探究分野は広大かつ深遠だ。

応用面でも、大きな動きがある。近縁種の遺伝情報をゲノム編集で書き換えて、クローン技術や、さらにはiPS細胞のような「万能細胞」の技術を応用することで、絶滅種を復活させられないかと、いう考えが、この一〇年ほどのうちに提案されるようになつた。いわゆる「脱絶滅(de-extinction)」と呼ばれるもので、これまでに、リヨコウバト、ケナガマンモス、ドードー、フクロオオカミなどが候補に挙げられてきた。当初は、あくまで技術上の可能性として受け取めていたものの、二〇二一年になつて、アメリカで、まさに脱絶滅を主要な目標に置いた新興企業が登場するなど、次第に真剣味を帯びたものとなりつつある。

「更新世末の大量絶滅」から「近代の絶滅」へ

取材を始める前の時点で、絶滅という現象をめぐつて、次のような認識を持っていた。

絶滅は、地球生命の歴史の中では、必然的なものだ。すべての生物種は、いずれ絶滅する。大量絶滅が起きると多くの種が消え去るかわりに、新たな種が生まれて、間隙を埋めていく。そのこと自体に善悪はない。例えば、人類が生まれるはるか前の恐竜の絶滅について、善悪が論じられることはあまりない。絶滅が悪いものであると観念されるのは、あくまで人がその生きものを絶滅に追いやつてしまつたときだ。

では、そういった「人為の絶滅」は、いつごろから起きていたのか。

最終氷期とその終了後にあたるおよそ七万年前から一万年前に起きた大型動物相の絶滅を、「更新世末の大量絶滅」、あるいは「第四紀後期の大量絶滅」と呼ぶことがある。ちょうど人類がアフリカから他大陸へと進出した時期と重なっており、その影響を受けたものだという説が有力だ。この時期に絶滅した大型動物で代表的なのは、北アメリカ大陸、ユーラシア大陸の各種マンモス、ユーラシア大陸のケサイや、ホラアナライオン、オオツノジカ、南北アメリカ大陸の各種オオナマケモノといったものが挙げられる。特に、マンモスについては、人類の狩猟の証拠が多く残つており、「過剰殺戮」^{オーバー・キル}が絶滅の主因となつた可能性が指摘されている。

一方で、この時期は、氷期と間氷期を繰り返す中で急速な気候変動が継続しており、そちらの方を重く見る議論もある。人類による狩猟の考古学的な証拠がない種も多く、単純な「過剰殺戮説」では説明しにくい。現在も、さかんな議論が交わされているところだ。⁽²⁾

しかし、「近代の絶滅」は、もう少し単純だ。短ければ数十年、長くても数百年のうちに、狩猟や、人為による環境の変化で種が絶滅するに至ったことが明瞭で、「人為か気候・環境変動か」というような論争は少ない。今や、地球上に人類は満ち溢れているのだから、これから多くの種が、人為によつて絶滅するに違いない。

では、いつたいどうすればよいのだろうか。

思考実験として、地球上から人類が消えれば、すべて解決するか考えてみよう。たしかに、人類が滅んでしばらくすれば、「人為」といえるような新たな絶滅はなくなるだろう。しかし、それで本当

によいのだろうか……。

決してそんなことはないはずだ。わたしたちもまた、他の生きものと同じように、生きるべく生まれてきた存在だ。長い進化の旅のはてに「このようにある」ことは、まずは肯定的に捉えるべきだろう。人の影響を排すれば「人為の絶滅」がなくなるのは当然であり、実際の課題は、わたしたち自身が生きつつ、他の生きものたちと共存するということなのだから……。

「絶滅後」を生きる、おしゃべりな生きものたち

そのような問題意識を背景に抱きつつ、本書の章立ては次の通りである。

第一章では、一八世紀に発見されてからわずか二七年で絶滅した、「巨大な人魚」ステラーカイギュウを扱う。生息地だった北太平洋亜寒帯域のベーリング島を訪ね、発見者であるゲオルク・ヴィルヘルム・シュテラー（一七〇九～四六）の記述を追うことで、まだ「絶滅」という現象が見出されていなかつた時代に、どれほど簡単にこの生きものが消え去ったのかを見る。同時に、ステラーカイギュウが、実は日本近海で進化した、「わたしたちのカイギュウ」だというあまり知られていない事実も紹介したい。

第二章では、一九世紀に絶滅したオオウミガラスを紹介する。この時代、地上から消えてすでに二世紀近くが過ぎていたドードーの標本が再発見されたことで、「絶滅」という現象が注目されるようになっていた。オオウミガラスの絶滅を恐れた自然史博物館がまず行つたのが、標本の確保であり、

それが種としての息の根を止めたことは、なんとも言い難いエピソードだ。

ドードーなどの絶滅鳥の研究者で、オオウミガラスの絶滅にまつわる調査を行つたアルフレッド・ニュートン（一八二九～一九〇七）の証言が、わたしたちの理解を深めてくれるはずだ。ニュートンは、ダーウィンの進化論の初期からの支持者で、アイスランドで捕獲された「オオウミガラスの最後の二羽」についての情報を収集し今に伝えた。また、ドードー やソリテア（モーリシャス島の隣のロドリゲス島にいたドードー類の絶滅鳥）の研究を行い、後年は野生の海鳥保護を訴えた。

第三章と第四章では、それぞれ二〇世紀の絶滅である北米のリヨコウバト、オーストラリア・タスマニア島のフクロオオカミ（タスマニアタイガー）を見る。リヨコウバトは北米において自然保護の象徴的な存在となり、フクロオオカミもオーストラリアで同様の重みをもつていて。

そして、第五章では、二一世紀になつてからの初めての大型哺乳類の絶滅となつた、ヨウスコウカワイルカ（バイジー）について語る。絶滅が事実上確定したとされる二〇〇六年の国際調査には、日本からも研究者が参加していた。絶滅危惧種として国際的な注目を浴びる中での絶滅であり、世界の自然保護関係者の間に甚大な衝撃を与える「事件」だった。

さらに第六章では、ゲノム編集の技術などを使つて、絶滅種を「復活」させようとする「脱絶滅」の研究と技術開発について見ていく。本当にドードー やフクロオオカミを復活させることができるのだろうか。今見通せる技術的な展望はどのようなものなのだろうか。脱絶滅がどのような社会的、倫理的、実際的な問題を提起するのか、その輪郭を確認したい。この動きが、伝統的な自然保護、種の保存の現場からは厳しい目を向けられていることも述べる。

すべての章で扱う種、テーマについて、なんらかの「現場」に足を運び、「今」を見渡す過程を経て執筆に取り掛かった。かつての生息地を訪ねることは最も重要視したし、できるだけ一次史料に近いものを参照し、現地での資料収集やインタビューによって理解を立体的なものにする努力もした。本書の想定読者である日本語話者とのつながりを常に意識し、二一世紀になつてからの新たな知見に目配りしつつ、「これから」に直結する新たな課題について考えた。結果、目の前に浮かび上がってきたのは、「近代の絶滅」をめぐつて絡まりあい、幾重にも重畠した巨大な問題の系だった。

絶滅動物たちは、「おしゃべり」である。今もわたしたちに、多くのことを語りかけてくる。最初は、郷愁や哀感を誘う、強い吸引力をもつた話題の主役として。次に、多くの生きものを絶滅に追いやつてきた、いや、今も追いやりつつある、ヒトという生きものの「本性」にかかる証言者として。また、生物進化に新たな理解をもたらす貴重な科学的研究の対象として。さらには、脱絶滅の議論の中で、生物にかかる倫理や新たな価値観を問う者として。

あらためて「近代の絶滅」を語り直す中で見えてくる新しい景色の中を、ぜひ一緒に旅していただければと思う。会えそうで会えなかつた生きものたちは、単なる執着やノスタルジーの対象ではない。きわめて今日的な課題を提起し続け、未来を考える糸口となる存在として、「絶滅後を生きている」のである。

目 次

はじめに おしゃべりな絶滅動物

第一章 「絶滅」を知らない時代の絶滅

一八世紀、ステラーカイギュウ

コラム① ステラーカイギュウは日本のカイギュウ？

日本で見る大型海牛類の進化

²⁷

I

第二章 「人為の絶滅」の発見

一九世紀、ドードー、ソリテアからオオウミガラスへ

34

第三章 現代的な環境思想の勃興

一〇世紀、生きた激流リヨコウバト

66

コラム② リヨコウバトと日本人画家と野口英世

97

第四章 絶滅できない！

——二〇世紀、フクロオオカミ(タスマニアタイガー)

第五章 それでも絶滅は起きる

——二世紀、ヨウスコウカワイルカ(バイジー)

第六章 ドードーはよみがえるのか

——二世紀、「脱絶滅」を通して見えるもの

終 章 絶滅動物は今も問い合わせる

——「同じ船の仲間たち」と日本からの貢献

199

157

130

104

注

謝辞など

211

第一章 「絶滅」を知らない時代の絶滅

——一八世紀、ステラーカイギュウ

一九九一年、ベーリング島にて

一九九一年九月、北太平洋亜寒帯域、カムチャツカ半島沖に浮かぶベーリング島の海岸を歩きながら、水面に目を凝らしていた。

海は、青々としているというより、もつと濃い色で、水の中にはゆらゆらと揺れるものがあつた。巨大なコンブだ。この浅い海の水面下には、コンブの森が広がつていて。ラッコの親子が、コンブの間を縫うように泳ぎながら、ウニの殻を割つて食べていた。微笑ましくも素晴らしい光景だったが、ぼくは周囲に視線を配り続けた。

水面に、小さな島のような巨大な塊が浮いていないだろうか。それはゆつくりと泳ぐ巨大な生きものかもしだす、そうだとすれば、ときに蒸気まじりの呼気がブシュと噴き上がるはずだ……。その生きものとは――

大きさだけを考えるなら、今の地球上、最大の動物たちであるクジラだと思われるかもしだす。

しかし、違う。

では、なにか、というと、実は、人魚だ。

ギリシア神話に由来する人魚“Siren”をそのまま名称にした分類群シレニア(*Sirenia*、海牛目)。つまり、日本の水族館でもときどき飼育されている、マナティーやジュゴンを含む仲間に属する生きものである。

もつとも、実際に水族館などで、マナティーやジュゴンを見たことがある人は、「どこが人魚なのだろう」と思うだろう。ヒゲが生えた顔に、でっぷりした胴体がつながり、腕もオールのように平らになつた「胸びれ」に変わつてゐる。人魚のイメージとは、かけ離れている。それでも、マナティーやジュゴンの仲間は、「人魚」とむすびつけられてきた。

ぼくがつい探してしまつたのは、この「人魚」の中でも最大の身体をもつステラーカイギュウだつた。学名は、*Hydrodamalis gigas*で、巨大(*gigas*)な水中の牛(*Hydrodamalis*)を意味する。こちらの名の方が、より実態に即していると思われる(図1-1)。

岸からほど近い浅い海で、このような巨大な生きものがコンブ^はを食んでゐるなら、目につかないはずはない。だから、やはりステラーカイギュウはこの海にはいないと考えなければならない。

そもそも、ステラーカイギュウはとつくに絶滅したとされる生きものだつた。

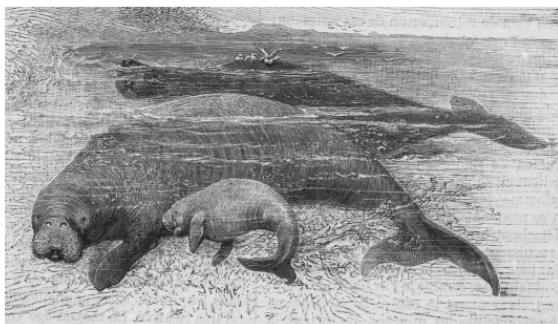


図1-1 1898年、フランスの科学週刊誌 *La Science illustrée* に掲載された、Victor Delosièreによるステラーカイギュウの復元図



図1-2 1991年に訪れたベーリング島の海岸(右)。ベーリング隊の漂着250周年記念式典が行われていた(左)

カムチャツカ半島沖のベーリング島にて、一七四一年に発見されたときには、すでにこの島と隣のメードヌイ島のまわりに、およそ二〇〇〇頭が生息するだけだったとされる。そして、発見から二七年後の一七六八年には、最後の一頭が狩られて絶滅した。

一九九一年、テレビ局に勤務して三年目の報道記者だった頃、カムチャツカ半島や沖合の島々の自然を紹介する特集コーナーを担当し、この海域を旅した。いわゆる東西冷戦が終わり、当時のソビエト連邦が情報公開を進める中、実現した取材だった。ベーリング島を訪ねるのはかねてから熱望していたことだったので、現地側担当者とのやり取りの中で、旅程にベーリング島を入れてもらえたときには、快哉^{かいざい}を叫んだ。

現地に到着すると、浅い海にびっしりと生えたコンブの森の中にステラーカイギュウの小島のような背中が浮いていないか探した(図1-2)。それを諦めた後も、砂浜に埋もれているかもしれない骨を探して回つて、実際に、それらしきものを見つけもした。島の博物館では、比較的小柄なステラーカイギュウの全身骨格標本を見せてもらい、会えそうで会えなかつたこの「北の海の優しい人魚」は、やはり実在したのだと、しみじみ感じ入った。

一七四一年、ゲオルク・シュテラーの発見

ステラーカイギュウが発見された一七四一年は、日本では江戸幕府第八代將軍、徳川吉宗の時代だった。漢訳洋書の禁が緩められ、蘭学への関心が高まっていた時期だ。一方、ベーリング海やオホーツク海など、北海道よりも北側の海は、すでに探検の時代に入っていた。ステラーカイギュウは、その探検の中で見出された新種の動物だった。

ヴィトウス・ヨナセン・ベーリング（一六八一～一七四一）というデンマーク出身の探検家が、ロシアのピヨートル大帝の命で、二度にわたる探検航海を行った。その二度目の航海（一七四一～四二）では、アラスカ南岸からアリューシャン列島の一部をヨーロッパ人としてはじめて見出すという発見をなしとげた。その後、嵐にあつて漂流した末、一月、カムチャツカ半島沖の無人島（のちにベーリング島と呼ばれる）の近くで難破し、上陸することとなつた。

多くの船員がビタミン不足に由来する壞血病に苦しめられており、船長のベーリングも、島に着いてすぐに亡くなつた。残された船員たちは、その後、壊れた船から新しい小さな船をつくつて脱出するまで、一〇カ月間にわたつてこの島で生活することを余儀なくされた。

厳しい島の生活の中で船員たちの健康を守る立場だつたのが、船医として乗り組んでいたゲオルク・ヴィルヘルム・シュテラーだ。「ステラー」とも表記されるが、本書では彼の母語であるドイツ語の読みに近い「シュテラー」とする。

シュテラーは、優秀な博物学者でもあり、この航海で、トド、オオワシ、メガネウ、ステラーカケ

スなど、多くの新種の生きものを発見した。それぞれ、英名ではシュテラーの名を冠した呼称が定着している。たとえば、トムは、Steller's sea lion' オオワシは、Steller's sea eagle' だ。

そして、本章の主役であるステラーカイギュウも、シュテラーが報告して、その名がつけられた生きものの一つなのである。ステラーカイギュウは、ベーリング島の周囲の浅瀬に住んでおり、シュテラーは上陸してすぐにこの生きものの存在に気づいた。

『海の獣』の記述

それでは、ステラーカイギュウとはどんな生きものだったのか。

もっぱらコンブなどの海藻を食べる、巨大だが温和な「人魚」であり、発見からわずか二七年で狩り尽くされた悲劇性も相まって、話には「尾ひれ」がつきがちだ。

そこで、この魅力的な生きものを観察した唯一の「専門家」である、シュテラー自身の説明を中心におきたい。

シュテラーは、一七四二年にベーリング島からカムチャツカ半島に帰還した後、しばらくはカムチャツカ半島に残って調査を続けた。ふたたびヨーロッパの土を踏むことなく、一七四六年、シベリアで亡くなつたものの、遺稿から『海の獣』『カムチャツカ誌』『ベーリング島誌』などが刊行された。

その中で、ステラーカイギュウについて詳しく述べた『海の獣』(De Bestiis Marinis)は、サンクトペテルブルクの帝国科学アカデミーから一七五一年に出版された。原文はラテン語だが、一八九九年に

英訳が成つて ⁽¹⁾いる。

それによると、シユテラ－は、島のまわりを泳いでいた生きものをカイギュウ類だとすぐ見破り、「マナティー」と呼んだ。そして、つぶさに観察した上で、詳述した。以下、他文書から時系列的な関係を補いつつ、見ていく(引用者訳。以下、特に断りのない日本語訳は同じ)。

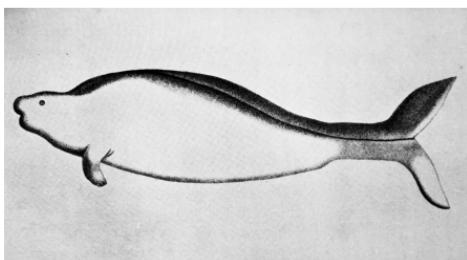


図 1-3 厳密な由来は不明だが、プレニスナーによるものと推定されるスケッチ。完全な標本から描かれた唯一のものと考えられ、19世紀から多くの書籍に転載してきた

この動物は海岸線に沿つた浅い砂地の海、特に淡水の流水がある川や小川の河口付近を好み、いつも群れで生活している。餌を食べるときは、コドモやワカモノを前に出し、側面と背面を取り囲み、常に群れの真ん中にいるように気を配る。(略)ほとんどの場合、家族全員が一つのコミュニティで一緒に暮らしており、オスは成長したメス一頭とその小さなコドモたちを連れている。

これらの動物は非常に食欲旺盛で、絶え間なく食べ続ける。あまりに貪欲であるため、生命の安全を顧みることもせずに、常に水面下に頭を留めている。(略)彼らは四、五分おきに鼻を水面に上げ、馬が鼻をかむときのように空気と少量の水を吹き出す。(略)餌を食べているとき、カモメが背中に止まり、カラスが豚やヒツジのシラミを食べるのと同じように、皮膚にはびこるシラミを食べることがある。

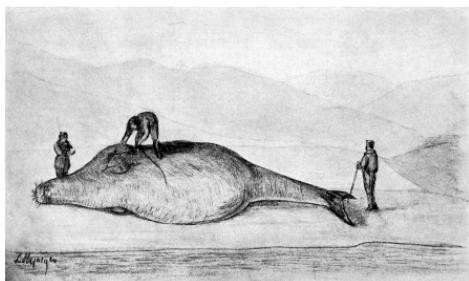


図1-4 1922年にアメリカで出版されたベーリングの航海誌英訳に掲載された、シュテラーによる解剖の復元図

浅い海で、静かにコンープを食べる様子が活写されている。このように平和な生きものであつたため、人が容易に近づくことができ、捕獲できたということにつながっていくのだから、この時点で、先行きを知る人にとっては、すでに物悲しさを感じさせる。

なお現地では、地図製作者・画家として乗り組んでいたフリードリヒ・プレニスナー (Friedrich H. Plenisser, 1877-1977) が、何枚かステラーカイギュウのスケッチをしたようだが、今に伝わっているのは一葉だけだ。それを見ると、まさにマナティーやジュゴンに似た姿はあるものの、体に対して頭が小さめであることがわかる。また、尻尾は、マナティーのような丸い形ではなく、ジュゴンに似た二股状になっていた(図1-3)。

体長一〇メートルに達する巨大人魚

シュテラーは、越冬後の1742年の春以降、狩猟で得た個体を計測、解剖、観察する機会を得た(図1-4)。もつとも、計測できたのは、七月一二日に捕獲したメス一頭だけだ。難破した船から取った木材を使って、島から脱出するための新しい小さな船をつくるために船員たちは忙しく、シュテラーはほとんど協力を得られなかつた。そこで、金銭を払つて船員たちを雇い、なんとか一頭だけ詳しい計測を行つて、その結果を表に

することができた。

まず気になるのは、大きさだろう。

掲げられた表の五〇近い項目の中で、最初に記されている「上唇の先端から二股になつた尾の片側の先端までの長さ」が、まさに「体長」に相当する。

二九六インチ、つまり、七・五メートル強。

今生きているカイギュウ目の中で最大のアメリカマナティー（ウェストインディアンマナティー、*Trichechus manatus*）が平均体長三・二メートルほどなので、その倍以上であることは驚かされる。もつとも、一頭だけの計測であり、他にもつと大きなものがいたことも間違いない。最大の個体はどれくらいになつたのだろうか。

シユテラー自身、海にいる大きな個体を見たときに、目測で「四～五ファズム」と表現した。実は、これは後々、混乱要素となつた。

目測だからもともと不正確であり、なおかつ幅をもたせている。さらに、当時ロシアで使われていたファズムという単位には、陸ファズムと海ファズムの二種類があつて、どちらを使つたかもわからない。これらの要素を織り込むと、結局、七・三～一〇・七メートル、とかなり広い範囲になつてしまふ。下限だと、シユテラーが計測したメスの七・五メートルにほぼ一致する。

しかし、現在は、シユテラーが見た以外の情報も考え合わせて、むしろ上限の一〇メートルに近かつただろうとされている。

他の島から見つかった十数万年前のステラーカイギュウの下顎の骨が、まだ成長が止まつていない

ワカモノのものであるにもかかわらず、シユテラーが計測したオトナのメスと同サイズだったことに加えて、ステラーカイギュウの前の時代にいたアメリカ西海岸の大型カイギュウ(クエスタカイギュウ)は、九メートル以上あつたことも傍証になつていて⁽³⁾。

さらに、もう一点、シユテラーの計測で目を引くものを紹介しておく。

「口から肛門までの消化管全体」が、五九六八インチ、およそ一五二メートルに及んだという。「体長の二〇・五倍」と、シユテラーは注釈している。

ヒトの消化管の長さは、身長の五～六倍と言われるから、それよりはるかに長い。文献によると、ウシ五一メートル(体長比二五倍)、ネコ二メートル(同三・五倍)、ヒツジ三メートル(同二七倍)、トラ五メートル(同五倍)というふうに、草食傾向が強いほうが消化管が長く、体長との比も大きいそうだ。⁽⁴⁾ステラーカイギュウにもその傾向が見られ、おそらくは、コンブを消化して栄養にしていくために必要だつたとされる。シユテラーは一五二メートルもの消化管を体内から引きずり出し自ら計測した。近くで常に肉を狙つていたというキッネを遠ざける必要があり、それだけでも大変な作業だつたろう。

樹皮のような皮膚、指のない前肢、そして咀嚼板……

さらに他の特筆すべき部分としては、次のようなものが挙げられる。

・分厚い皮に覆われており、それは動物の皮というより、オーケの古木の樹皮のようだつた。厚さ

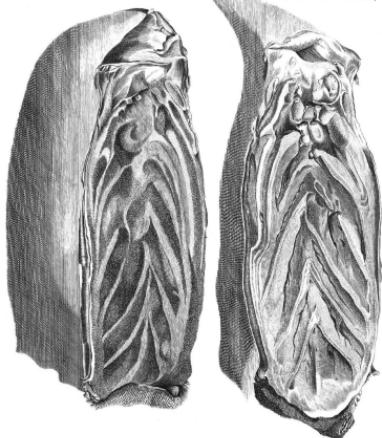


図1-5 『海の獣』に掲載された咀嚼板のスケッチ

は一インチほど(一・五センチ程度)であった。
 • 両顎の唇に剛毛が生えていた。それが海藻を(岩から)引き剥がす際に歯の代わりとなり、咀嚼中に口から物が落ちないようにする。両顎の唇はウシの唇と同じようく動く。

• 口の中に歯はなく、コンブを臼のようすりつぶす部分を口蓋と下顎にもつ(『海の獣』には、この独特の器官、咀嚼板の図版がある。図1-5)。

われ、ブラシのように固い毛が密集していた。

ここに挙げた特徴は他の生きものには見られない、あるいは珍しいものばかりだ。

シユテラーは、全身の骨格標本や剥製を持ち帰れないか検討し、コドモの皮に草を詰めた剥製まで準備したが、結局、新しい船に乗せることはできなかつた。

もしも、それを持ち帰つていれば、樹皮のような皮膚、唇の剛毛、指のない前肢とブラシのような毛などがもつとはつきりとわかつただろう。

結局、シユテラーが持ち帰ることができたのは、咀嚼板の上下セットだけで、それらも一時行方不明になつていた。しかし、ロシアのサンクトペテルブルクの博物館で、一九世紀になつてからそれら